

環境学の

授業拝見!

理学、工学、人文社会科学、異なる専門領域の学生
がともに学ぶ環境学研究科ならではの授業です。

【今回の授業】

臨床環境学研修

櫛田川流域・伊勢湾沿岸の持続可能性に関する 分野横断的な診断と処方

環境学研究科の博士後期課程を中心に様々な分野の学生と教員、研究員がともにフィールドを調査し、地域の持続的な発展に向けての課題や対応策を提案する臨床環境学研修。対象フィールドの松阪市、櫛田川上流域から鳥羽をめぐる2泊3日の学外実習が行われました。「大学院後期課程といえば、研究に没頭し専門を深めるとき。しかし学位を取っただけでは世の中の役に立たない。常に現場に目を向けていることが重要」と語る担当教員の加藤博和准教授。

松阪市では、木質バイオマスの活用に取り組む事業者を訪問。工場を見学し、森林資源とバイオマス利用の課題についてヒアリング。山間部の「うきさとむら」では、高齢化、人口流出と問題山積のなかで村おこしに取り組む女性たちに会って、山間地域の厳しい現実を実感。松阪市、多気町、飯南森林組合とのワークショップでは、グループで「森林資源とバイオマス」についてディスカッションしました。

「学生も教員もバイオマスや森林の専門は一人もいない。でも、環境学研究科にいる限り“専門じゃないからわからない”とは言わせない」と加藤准教授。地域の現状を受け止め、どのような課題を見出すか、一人一人に、現場での瞬発力と感性が求められます。



▲木質バイオマス熱利用施設の見学



▲ワークショップ風景



▲うきさとむら

陳 淑珮(チン シュクハイ)さん
台湾
社会環境学専攻 環境政論講座
博士後期課程



うきさとむらで考えたこと。

この研修では、見学やワークショップの進行を担当しました。訪問する先々で、いろいろな問題意識が浮かび上がりました。特にうきさとむらは、過疎に悩む中山間地域で、様々な方法で「外」から「若者」を呼び込むことを人口流出の対策として行っていますが、それは「適切」な対策であると言えるか。「外」から「若者」を呼び込むより、地域で生まれ育つ「若者」はなぜ「外」へ行くのか。そこをまず、考えなければならぬと感じました。